

知っていますか？徳島の世界農業遺産：

伝統農業の保全と活用にむけた国内外の取り組み

内藤直樹(文化人類学、アフリカ地域研究)

平成30年3月8～9日にローマ(イタリア)で開催された国連食糧農業機関(FAO)・世界農業遺産(GIAHS)科学助言グループ(SAG)委員会において、本学が支援をおこなってきた「にし阿波の傾斜地農耕システム」が世界農業遺産に認定されました。

世界農業遺産(GIAHS)とは、世界の優れた農-文化システムを保護・支援するイニシアテヴィブです。そのことを通じて、世界の食糧安全保障、生物と文化多様性の保全、そして何より生活の向上をはかることが期待されています。2008年に中国、フィリピン、チリ、ペルー、アルジェリア、チュニジアの6か国が初めて認定され、2018年3月現在までに19か国49サイトが認定されています。日本には徳島を含む11の認定サイトが存在します。

にし阿波地域(三好市・美馬市・つるぎ町・東みよし町)の集落は山の中腹に分布しています。集落の多くは海拔300-700mに位置しており、傾斜角はしばしば30-40度に達します。低地の住民は、山地のことをソラ-天空-と呼んできました。これらの山地の住民は棚田や段畑のかわりに傾斜地農業を営んできました。人びとは、このような厳しい環境にも関わらず、なぜ農業を営んでこれたのでしょうか？

日本の国土は複数のプレートの境界に位置しているため、地震が頻発します。にし阿波は日本で4番目に大きな島である四国を貫く山地に位置します。この山地は日本最大級の断層である中央構造線の一部を構成しています。地質学的な時間のなかで繰り返される地震と地滑りは破碎帯を形成しました。この破碎帯の脆い地質とこの地域の多雨は、地滑りや山腹崩壊を引き起こします。地質学的にみれば、こうした環境で最も地盤が安定する角度は30-40度です。つまり、山の中腹に居住することは、地質学的・気象学的な環境への文化的適応として理解できます。

この地域での持続的な土地利用の鍵は土壌流亡の防止にあります。そのために人々は採草地でカヤを育て、それを刈り取って円錐状に積み重ねて保存したうえで、刻んで畑に被覆します。カヤを畑に被覆することは、土壌流亡を効果的に防止するだけでなく、土壌に養分を供給します。また、独自の農具が、流亡した土壌を元の場所に戻したり、礫を砕いて土を創り出すために用いられます。つまり、これらの農業技術は単に土を「守って」いるだけでなく、「創って」いると言えます。

この地域の人々は、さまざまな雑穀や野菜類による自給的農業と集約的なタバコ農業を400年以上組み合わせさせてきました。社会経済的な変化の中でタバコ生産は衰



退しましたが、他の商品作物生産に転換し、自給的農業も実践され続けています。シコクビエやタカキビなどの雑穀は、それらが栽培化された東アフリカを含む多くの地域と共有できる重要な遺伝資源です。さらに、カヤを生産する採草地は、さまざまな野生生物のすみかとなっています。もちろん、農業に関係したさまざまな社会経済的実践も行われています。現在では、グリーンツーリズム等によって農業経済を振興しようとしています。

四国の域内 GDP は日本全体の約3%にすぎません。近年の東京一極集中は、深刻な過疎化の問題を引き起こしています。生物文化多様性の危機は、環境の過剰利用だけでなく、過少利用によっても引き起こされます。徳島のサイトの祖先は、脆い山の斜面に適応した、持続可能で固有の農業システムを創り出しました。いま、祖先から引き継がれた農業システムは、現代の社会経済的文脈の中で再編されつつあります。

今後私たちは、徳島が誇るこの農業システムを「人類の遺産」として活用していくことを考えていく必要があります。環境の過剰利用や過少利用による生物文化多様性の危機を解決して、私たちの惑星を持続可能なものにするために、世界農業遺産に関わる知識、アイデアや実践をみなさんと共有したいと思います。

総合科学部公開セミナー

第13回：6月29日(金) 18:30~20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館北棟3階 301講義室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先：

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksounks@tokushima-u.ac.jp